校長室だより
No.　3
平成 30 年４月 20 日(金)

強く　やさしく

六ツ美中部小学校校長
加藤嘉一（かとうよしかず）

自己の成長を自覚し新たな自分を創る子供を育成する
－自己有用観をはぐくむペア活動－

【４月９日（月）ペアでお弁当】

本校では、３年前よりペア学年（１・６年、２・５年、３・４年）での交流を始めました。今年はさらに一歩進み、ペア学年の中でペアの子を決め、交流活動を進めます。(学年の人数により、１対１であったり１対２だったりします) 学校の兄弟のように個と個のかかわりをつくります。これまでより、表面的なかかわりではない人間くさいかかわりが増え、笑いあり涙ありの場面が出てくることを想像しています。先週９日（月）はお弁当の日。先生方は学年同士相談し、この機会を生かして、ペアでお弁当を食べる機会を作ってくれていました。(写真)

家へ帰ってからの子供同士のかかわりの場が昔より少なくなったといわれ、久しいです。家族という一番小さな社会から、大人が過ごす大きな社会へはばたくまでに、今は異学年とのかかわりが大きな意味をもつと考えています。

【これまでのペア学年交流例】
- 清掃活動　・給食当番活動
- 読み聞かせ　・レクリェーション
- 収穫祭など調理活動　・給食
- 修学旅行、山の学習へのメッセージ活動
- 田植え、稲刈り活動（２・５年）
- なわとび練習　・合同体育
- 委員会の企画　・English Street
- 入学式、６年生を送る会メダル渡し

※今年は、下駄箱も１・６年、２・５年、３・４年で向かい合わせに配置しました。このほかに、今年からのペア活動で効果的な活動を探ります。

わたしは小学生の段階で、できるだけうれしい涙、悲しい涙（いじめ等ではない）を流させたいと思っています。そのひとつに異学年交流があると考えています。この３年間、先生方は左のような様々な交流の場を作ってくれました。子供たちを見ていると、異学年交流を通して、同学年中心のかかわりでは経験できない自己有用観※と心が動く瞬間があったと感じています。特に一番印象的だったのは、卒業式前のおわかれの会（１～３年生と６年生とで行う会）で、１年生の子を見て涙を流す６年生を一昨年から目にするようになったことです。

異学年とのかかわりは、大きい学年の子が小さい学年の子を愛おしく思う心

や思いやる心を育むだけでなく、自己有用観を育てるものと考えます。小さい子にとってもモデル・目標になるような先輩の存在を得たり、自分にはかなわない存在を実感したり、同学年の生活にはない経験を得ると考えます。家族の兄弟で経験できることかもしれませんが、学校で兄弟のような関係があることもよいと思うのです。「あんなふうになりたい」「あの人のようにすればよいのだな」と思える存在をもつチャンスを、できるだけ増やしてあげたいのです。

わたしが着任した一年目、PTA の懇親会で「以前は中学生の子と一緒に行う活動があって、娘はものすごくよい思い出にしている」と話してくださったお母さんがいらっしゃいました。本校は、かつて中学校と併設されているよさを生かし、平成 13 年に小中学校の連携教育の研究発表会「異年齢交流ではぐくむ豊かな心」を行っています。（わたしは当時六ツ美南部小学校に勤務し、協力校として取り組んでいたのでよさと課題はよくわかります）そして、当時の研究紀要を読むと、「かかわりを深めることがそれぞれの人間形成に深く影響を与えることが実証された」（平成 14 年度研究紀要「あとがき」）と書かれていました。本校では、異学年交流の礎があります。現在小中の交流は、生活の時間帯や行事の違いなど、物理的な困難さを伴うため、体育祭で中学校の吹奏楽部に来てもらったり、同窓会に参加してもらったり、可能な部分での活動に留まっています。だからこそ、異学年交流として、ペア学年・ペア交流をしっかりと位置づけていきたいと考えています。

【平成 30 年２月
１・６年生で凧揚げ】

【自己有用観※】文部科学省・国立教育政策研究所　生徒指導リーフより

「自己有用感」とは

「自己有用感」は、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた、…等、相手の存在なしには生まれてこない点で、「自尊感情」や「自己肯定感」等の語とは異なります。

最終的には自己評価であるとしても、他者からの評価やまなざしを強く感じた上でなされるという点がポイントです。単に「クラスで一番足が速い」という自信ではなく、「クラスで一番足が速いので、クラスの代表に選ばれた。みんなの期待に応えられるよう頑張りたい」という形の自信です。その意味では、「クラスで一番」かどうかは、さほど重要ではなくなっている、とさえ言えます。

「自己有用感」の獲得が「自尊感情」の獲得につながるであろうことは、容易に想像できます。しかしながら、「自尊感情」が高いことは、必ずしも「自己有用感」の高さを意味しません。あえて、「自己有用感」という語にこだわるのは、そのためです。

（参考）　http://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf